

W.A.モーツァルト／ヴァイオリン協奏曲第3番ト長調 K.216

モーツァルトといえばクラヴィーア、つまり鍵盤楽器の名手というイメージが強いが、ザルツブルク時代には13歳の時から宮廷楽団のコンサートマスターをつとめたほどの優れたヴァイオリン奏者でもあった。コンサートマスターは、オーケストラを牽引するだけでなく、時には協奏曲の独奏者をつとめることもある。本日の演奏がまさにそうであり、第1コンサートマスターの崎谷直人が独奏者となる。そしてモーツァルトも、自作のヴァイオリン協奏曲を自らの独奏で披露した。

モーツァルトの5曲あるヴァイオリン協奏曲はすべてザルツブルク時代の作品であり、本日演奏される《ヴァイオリン協奏曲第3番》を含む第2番から第5番までが、1775年に集中して作曲されている。これらの作品にみられる明朗で優美な旋律は、ギャラント様式と呼ばれるフランスの優雅で洗練された音楽様式を思わせるが、モーツァルトは直前に滞在したミュンヘンでこうしたフランス風のスタイルを知った。とはいえ、第1楽章冒頭のさっそうとした主題旋律をはじめとして、曲のすみずみまでモーツァルトらしい旋律が行き渡っている。

第1楽章：アレグロ、ト長調、4分の4拍子。ソナタ形式。オーケストラの主題提示につづいて、独奏ヴァイオリンがあらためて主題を歌い出す。

第2楽章：アダージョ、二長調、4分の4拍子。弱音器付きの弦やピッチカートを伴奏に、独奏ヴァイオリンが優美な旋律を奏でる。

第3楽章：ロンド、アレグロ、ト長調、8分の3拍子。ロンド形式。途中で拍子が2拍子に変わり、短調の主題に続いて明るい民謡風の旋律が現れるあたりは、フランス風の「ポプリ（接続曲）」を思わせる。

楽器編成：フルート2、オーボエ2、ホルン2、弦5部、独奏ヴァイオリン

*スコア上の表記

遠山菜穂美

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。